

武庫川女子大学教育研究所／ 子ども発達科学研究センター 2011年度活動報告

Progress Reports on
Mukogawa Women's University Center for the Study of Child Development 2011

河合 優年* 難波 久美子** 佐々木 恵**
石川 道子* 玉井 日出夫***

KAWAI, Masatoshi, NAMBA, Kumiko, SASAKI, Megumi,
ISHIKAWA, Michiko & TAMAI, Hideo

目次

- I. はじめに
- II. 2011年度の子ども発達科学研究センターについて
- III. 2011年度活動概要
 - 1. 第8回子ども学会議学術集会開催
 - 2. すくすくコホート三重・武庫川チャイルドスタディ
 - 3. 西宮市研究協力・受託事業
 - 4. 子どもの育ちと学びを支える専門職の方のための「子どもの発達」を学ぶ会
- IV. 研究業績（2011年）
- V. 引用文献

*武庫川女子大学教育研究所（子ども発達科学研究センター）・研究員、文学部心理・福祉学科・教授、**武庫川女子大学教育研究所（子ども発達科学研究センター）・助手、***武庫川女子大学教育研究所（子ども発達科学研究センター）・研究員、客員教授

I. はじめに

2009年4月に、教育研究所の下部組織として設置された武庫川女子大学教育研究所／子ども発達科学研究センター（以下、子どもセンター）も丸3年を経過することになった。センターの母体となったJST データ（「脳科学と社会」研究開発領域 計画型研究開発「日本における子どもの認知・行動に影響を与える要因の解明」収集コホートデータ）も、研究協力者全体を匿名化したデータと、三重県で継続されている追跡可能な連結可能（匿名化）データの2つのデータセットとして、子どもセンターに国から移譲された。これに関しては、2011年3月に譲渡契約がJST との間で完了している。これにともない、子どもセンターの機能として、匿名化データ部分について、研究者の共同利用に係るデータの研究者への提供とそれらの管理が加わったことになる。すでに、筑波大学の研究グループからの依頼が来ている状況である。

子どもセンターの本来の機能である、子どもの追跡調査は、後述されるように、三重県の子どもたちと西宮市の子どもたちについて引き続き進められている。共同研究グループである三重グループでは、2011年に研究協力者の一部が小学校に入学するという1つの節目を迎えた。そして2012年4月には、残りの全員が新入学を迎えることになる。発達障害の発生機序や学齢期の社会性形成、成熟児コホートのストレスマネジメント、耐える力の形成など、今日の喫緊の問題について解決の糸口をつかむという目的にさらに近づきつつある。子どもセンターは、時限付きとしてスタートしているが、期間内に予定された目標は概ね達成されるものと考えている。子どもセンター運営に関しての外部資金は、前年度と同様のものを得ており、概ね順調に進められている。2012年度についても、継続しての資金獲得を計画している。

2012年度には設置4年目に入ることになるが、これまでのデータが死蔵されることなく研究に活用されるよう、国内外の研究者への資料提供と共同研究を目指してさらに研究活動を進める予定である。

II. 2011年度の子ども発達科学研究センターについて

1. 本年度の取り組みについて

2011年度の取り組みの詳細については概要に述べられているが、従来の研究を継続しながら、研究の充実と社会還元をセンターのテーマとして取り組んできている。

センターの活動は、①JST 研究の継続研究として進められている「乳幼児期の個体・環境要因が児童期の社会的行動に及ぼす影響についてのコホート研究」（科学研究費補助金基盤研究（A））、②西宮市からの「10か月児アンケート健康診査及びフォロー事業に関

する委託」に関わる業務と研究、③ JST データの移譲を受けてから開始された、研究データの共同利用に係る管理と貸与等の運営、④研究成果の学内学生への教育的提示、⑤地域連携の5つに分けられる。

①のコホート研究は、計画に従って、西宮市（武庫川チャイルドスタディ）では5歳児の観察と質問票による調査が、三重県（すくすくコホート三重）では小学校1年生の学校適応調査、NICU コホートの5歳児の観察と質問票による調査が進んでいる。データ・クリーニングが進み、2011年度は多くの成果発表がなされた。

②の西宮市の「10か月児アンケート健康診査」については、これまでと同様にデータの整理とフォロー事業である「すくすく相談会」対象者の抽出作業を行っている。また同時に、子どもセンターでのデータ解析によって、保健師の研究発表の連名者として、その成果発表に寄与している。2012年度が最終年度になる可能性があるため、現在報告書作成にむけて調整に入っている。

③のデータ管理については、匿名化データの貸し出し依頼等を受けつけている。当面の間は、旧 JST コホート研究のメンバーを中心としたデータ貸与に限定されている。研究全体の経過と武庫川グループの成果報告等は、2012年3月31日に JST 東京本部別館ホールにおいてなされる。国との契約規定では広く関心のある研究者に対してもデータの使用を認めているので、今後利用範囲をどのように広げるのか、貸与方法をどのようにするのかなどの検討が必要となっている。

④子どもセンターの設置目的の中には、研究成果の学内学生への教育的提示を通じて、研究への動機付けを行うことが示されている。子どもセンターが3年目を迎え、ようやく一部ではあるが、そのような見学を受け入れることが出来るようになった。心理学専攻の学生を対象に、観察室での装置の説明やセンターでのデータ解析の様子を見学してもらい、成果物などを通じて研究活動への啓発をすすめている。すでに見学者の中には、大学院に進学し赤ちゃん研究を行いたいというような学生が出てきている。また、子どもセンターが実施する勉強会（下記⑤）の一部は、臨床心理学専攻の院生にも開放されている。

⑤研究成果の地域への還元として、専門職者に対し、毎月1回の勉強会を開催してきた。この活動も3年目になり、新たに着任された石川先生を加えて、扱うテーマがより発達障害の発生機序や臨床現場でのアセスメント、対応方法など実践的なものへと変化してきている。

2. 外部資金の獲得について

子どもセンターは教育研究所の研究組織として設置されているが、外的評価の指標として外部資金の獲得を期待されている。2011年度の研究費としては、科学研究費補助金（基盤研究（A）：課題番号21243039）、西宮市からの委託料、私立大学経常費補助金特別補助

の他、メディカ出版などからの研究助成費を受けて研究が進められた。

2012年度についても同様の資金確保を目指している。

3. 次年度に向けて

子どもセンターの4年目の活動計画は概ね昨年通りである。①の追跡研究においては、協力者のうち、成熟児コホートの協力者の一部が小学校2年生になり、標準データとしてのWISC知能検査を実施する。ようやく子ども自身による調査票への回答が可能となってくる。これにより、母親による評価や観察による間接的な評価から直接的な反応の取得が可能となることが期待されている。

②西宮市の10か月児アンケート健康診査は、引き続き実施される。このアンケート健康診査は、パネル調査という性質も持っているため、完全匿名化したデータに基づき、デモグラフィックデータの整理と分析を行う。これによって、西宮市の乳幼児の発達像を明らかにすると共に、①のコホートデータのコントロール群としての標準データを得ることができる。また、最終年度として報告書の作成に入る。

③については、匿名化データの管理を続けることになる。管理をどのように行うのか、また他大学との関係性などを含めて、将来検討を行う予定である。

④および⑤に関しては、2011年度同様に進めるとともに、勉強会の総括を行い、何らかの成果物を出版できるように、すでに調整に入っている。

上記以外の研究計画として、昨年度よりスタートしているアメリカ・スポケーン市のゴンザガ大学との、子どもの生活実態調査が継続される。2011年度に計画されていた事業は、東日本大震災との関係で、アメリカからの訪問が延期になり、調査票の準備のみが進められている。2012年度は、小学校・中学校での学級適応と学力についての調査実施を計画している。

Ⅲ. 2011年度活動概要

1. 第8回子ども学会議学術集会開催

2011年10月に第8回日本子ども学会議学術集会が、学院の全面的な協力・支援のもとに、本学日下記念マルチメディア館で開催された。当番校として武庫川女子大学・子どもセンターが全体を統括した。

第一日目は、子どもの支援を中心として、NICUの追跡研究を進めている大阪府立母子保健総合医療センターの藤村正哲先生、大阪大学大学院の金澤忠博先生による講演（座長：榊原洋一先生（お茶の水女子大学大学院）、指定討論：河合優年）、前文化庁長官で本学教育研究所・子どもセンター客員教授の玉井日出夫先生による子育て文化についての基

調講演が行われた。第二日目は、秋篠宮妃紀子殿下の御成をいただき、東日本大震災の子どもたちの支援のありかたについてのシンポジウムを終日行った。秋篠宮妃紀子殿下は全セッションに参加された。

午前中のセッションでは「あしなが育英会」の八木俊介先生から、阪神淡路大震災を契機に設立されたレインボーハウスの活動を通じた孤児・遺児の支援のあり方についての話題提供、および神戸市教育委員会の中溝茂雄先生から、神戸市教育委員会の震災後の取り組みについての話題提供を受けた（座長：一色伸夫先生（甲南女子大学）、指定討論：小石寛文先生（神戸学院大学））。午後は、仙台白百合女子大学の太田純先生より、子どもを支える地域の重要性について、日本プライマリ・ケア連合学会東日本大震災妊産婦支援プロジェクトの吉田穂波先生より被災地の子どもたちの現状についての報告を、そして宮城県石巻市立湊小学校の佐々木丈二先生より、被災地の小学校校長として子どもたちをどのように支えてきたのかについての話題提供をいただいた（座長：内田伸子先生（お茶の水女子大学）、指定討論：八木俊介先生、中溝茂雄先生）。

進行に関しては、本学の多くの部局による支援を頂いた。これら学院からの多くの援助のもとに、子どもセンターが持つ機能としての、社会貢献の一部としての役割が果たされたものと考えている。これらの詳細については、雑誌チャイルドスタディーの2012年版に掲載される。

2. すくすくコホート三重・武庫川チャイルドスタディ

子どもセンターの基礎研究部門の活動にあたる、コホート研究は計画通り進行している。本年度は、震災の影響で科学研究費の配分が遅れたが、外部資金を含めて最終的には活動に支障を来すことはなかった。

（1） 2011年度の進捗

すくすくコホート三重では、6歳時点の調査が全数終了し、小学校に入学した一部の児に対し入学時調査が実施された。また、2008年度から開始された、誕生後に新生児集中治療室（NICU）に入院した子どもを対象とした、NICUコホート調査については、3歳6ヶ月児の調査と観察が終了し、5歳児の調査・観察が開始された。

臍帯血を使った母子の生理的ストレス関係を解明する研究チームは、方法論の確立を終えた。これらについては、研究報告がなされている。

武庫川チャイルドスタディでは、5歳児の調査・観察が開始された。

研究全体としては、データセットのクリーニングおよび、画像データのイベントレコーディングが順調に進んでおり、それに伴って研究発信が加速されている。また、これらの結果の発信を含めて、すくすくコホート三重と武庫川チャイルドスタディ共同で、調査協

力者向けのニューズレターを夏号、春号として発刊した。ややもすると、難しい研究であると思われる臍帯血を利用した研究などについても、紹介することができた。

2012年2月には、「乳幼児期の個体・環境要因が児童期の社会的行動に及ぼす影響についてのコホート研究」の共同研究者を対象として、全体ミーティングを開催し、これまでの経過を総括し、4年目を迎えるにあたっての現状確認と今後の方向性について確認する予定である。

(2) 今後の展望

すすくコホート三重では、研究の目的である学童期の社会性の測定に入ることになる。小学校以降は、自記式の調査が可能になるので、心理的側面を保護者、教員の視点だけでなく、多面的にとらえることが可能になる。2012年度はすすくコホート三重の成熟児コホートの協力者全員が小学校に入学する。今後は、教育委員会等とも密接に連携をとりながら、今後の研究について検討を加えることになるだろう。

3. 西宮市研究協力・受託事業

(1) 2011年の進捗

西宮市地域保健グループとの研究協力は、2011年度も継続された。2008年度に「乳児後期アンケート」をパイロット研究としてスタートさせ、2009年度からは、「10か月児アンケート健康診査及びフォロー事業」として市からの委託を受け、研究協力を継続している。また、アンケート結果に基づき、ハイリスク児の抽出を行い、フォロー事業である「すすく相談会」への参加を促す取り組みも継続された。2008年にパイロット研究の対象となった児の3歳児アンケート調査が終了し、引き続き、2009年度の健康診査対象児に対し、3歳児アンケート調査が実施されている。

(2) 今後の展望

2012年度は、計画では最終年度となっている。個別観察を含めた小規模のパイロット研究と、中規模調査研究のデータを比較しながら、西宮市の子どもの発達についてのノーマティブデータの整理を進める。これに基づいて、2012年度中の報告書作成を目指すとともに、初期発達について心理特性・運動特性についての発達曲線の確認、西宮在住乳幼児の発達傾向の確認について、保健所担当者との検討を進める。

4. 子どもの育ちと学びを支える専門職の方のための「子どもの発達」を学ぶ会

(1) 2011年度の取り組み

2010年度は、ペアレント・トレーニングの理解を中心に、養育者に対して、専門職者がどのような支援ができるのかについて議論がなされた。

ペアレント・トレーニングで、トレーニングの目標を設定する際に、どのような時期にどのような目標を設定するのかという点は、専門家が提案できることの1つであった。特に、最低限、いつまでにどのようなことができなければならないか、ということは、目標設定の上で重要となる。しかし2010年度は、そのようなポイントについては例示や体験談にとどまり、体系的に検討に入ることができなかった。

それを受け、2011年度では、いつまでに、どのようなことができているとイケないのか、そして、ある時期までにできていないと、その後どのような点で困るのか、ということを経験的に理解できるような取り組みを行った。特に、発達障害が疑われる児の発達において、単に遅れがみられるということだけでなく、児が独特な方法で行動を獲得している場合があることに注目して検討が進められた。例えば、瓶のふたをあけるような行動は、視覚と両手の運動という、知覚運動協応が必要であるが、知覚的な分析を行わないでふたを開けるような行動が形成されることがある。このような場合では、その容器の開閉はできるが、他の容器や瓶への一般化ができないことになる。

このような、特定の場面では問題なくこなせているが、状況が少し異なると問題行動が現れてくるような子どもの発達の特徴を、現場経験のある参加者から具体的な例を求めながら、整理し検討することとした。

(2) 実施記録

学ぶ会は、武庫川女子大学学術交流館1階会議室を利用して、おおむね月1回、土曜日に開催された。講演・検討時間は、10:00～11:30である。開催日時と実施内容を表に示した。

(3) 各回の講演内容抄録

1) 第1回 認知発達の基礎

(講師：河合優年)

i. 今年度の取り組み

学ぶ会も足かけ4年を経過することとなった。母子保健に関する事例検討から始まり、家庭での子育てのアドバイスに生かすペアトレなど、理論と実践を統合するべく、様々な取り組みを進めてきた。今年は、「何がいつまでにできていなければならないのか」とい

表 子どもの育ちと学びを支える専門職の方のための「子どもの発達」を学ぶ会 2011開催報告

回	日程	テーマ	タイトル	担当者	参加者数	院生参加
1	6月11日	発達概論	認知発達の基礎	河合優年 (武庫川女子大学)	18名	0名
2	7月2日	発達障害概論 0歳児の発達	自閉症スペクトラムの 捉え方 0歳児の気になる行動 の特徴	石川道子 (武庫川女子大学)	25名	0名
3	8月6日	1歳児の発達	1歳児の気になる行動 の特徴	難波久美子 石川道子 (武庫川女子大学)	25名	0名
4	9月3日	〈台風接近のため中止〉			-	-
5	12月3日	2歳児の発達	2歳児の気になる行動 の特徴	難波久美子 石川道子 (武庫川女子大学)	16名	0名
6	1月7日	運動発達とその支援	運動を育てる	青木智春 (岐阜県立岐阜聾学校教諭)	15名	3名
7	2月4日	3歳児の発達	3歳児の気になる行動 の特徴	難波久美子 石川道子 (武庫川女子大学)	16名	1名
8	3月3日	総括		石川道子 (武庫川女子大学)	-	-

う視点から、一見発達過程において、その段階で通過していなければならない指標については通過（クリア）しているが、臨床経験から、「なんだかすっきりしない」「気になる」というような事例を取り上げながら、私たちが持っているといよと考えられる、「臨床的に役立つ視点とはどのようなものなのか」について検討を加えてゆく。

ここでは、いわゆる「at risk」という現時点での危険判断だけでなく、「できていない状態のまま放置すると、後で何に困るのか」という「developmental hazard（発達の危険要因）」の視点にも注目し、家庭内での生活のみならず、後の学校適応、社会適応をも視野に入れて検討・議論してゆく。臨床現場での具体例を通じて、その背景にある理論やその事例が示している潜在的な危険性についても考えてゆく。

ii. 子ども理解になぜ認知発達理解が必要なのか

今回は、今年の第1回目ということもあり、子ども理解の枠組みについて述べてみたい。中心とする枠組みは、昨年行ってきたペアトレの中でも使われていた、認知という用語である。この問題に入る前に、これまでも使われてきている「発達」という用語について少し述べておきたい。

「発達」という用語が様々な場所で用いられている。近年の刊行物を見てみると、子どもの発達についての考え方が少し変化してきていることが分かる。かつての発達の概念は、未熟な存在である子どもが有能な存在としての大人に至るまでの、上昇的な変化をさすものとしてその意味を定義することが多かった。しかし、この考え方に従うと、完成さ

れた大人になってからは発達現象がなくなり、後は老化もしくは劣化という、下降的な変化に転ずるということになる。

しかし、実際には私たちは大人になってからも様々な形で変化し続けている。この変化は、環境に適応するための変化で、自分を快適な状態に保つためのものといえる。記憶力が低下してきたら、外部記憶であるメモをうまく使って、記憶力を維持しようとするような場合がこれに当たる。近年の発達観は、このように、その段階（時点）で持っている機能を使って自らを快適な状態にしようとする、時間軸に沿った適応的な変化に移行してきている。

この考え方に従うと、人間が環境の中でうまく生きていくために自らを変化させている間は発達し続けていると考えられるのである。赤ちゃんが泣き声を使って自分の不快な状況を伝えようとする場合も、大人が非言語的な合図を使って不快さを伝えようとする場合も、その仕組みは同じである。自己と他者との関係性を円滑にたもち、自分の快適さを保とうとしているのである。この意味では、発達は生涯にわたって継続するものと言える。

今年度は、普段の臨床活動や日常生活の中で観察できるような子どもの行動から、発達障害にアプローチしてゆく。「at risk」にあり、うまく生きるための変化が難しい子どもがどのような特徴を持っているのか、また、今は何とかやっているが、なにか気になる子どもが持っている特徴とはどのようなものなのか、これらの問題を検討して行きたい。

iii. 行動の仕組みについて

私たちは自分を取り巻いている様々な情報を取り込んでいる。寒さや暑さ、知っている人か知らない人か、話して良いタイミングかだめなのか。人が生活をしていく上で判断すべき情報の種類は多様である。このような情報を人間が処理する過程は比較的明らかになってきており、脳内機構まで解明されているものもある。このような一連の過程が図に示されている。

初期の発達段階にある新生児や乳児は、誕生時から準備された基本的な機構である、知覚機能などを使って外界の情報を得ようとする。このような過程は知覚と言われ、視覚や聴覚、触覚などがそれに当たる。しかし、それだけでは、そこに何かがあるという情報が与えられるだけである。例えば、お母さんの顔とそれ以外の人の顔を区別するという事は、そこに「人の顔」があるという事とは大きく異なるはずである。それは特別な意味を持った存在としての、「おかあさん」の顔なのである。このような意味づけをするためには、さらに複雑な処理が必要となる。目の前にある対象と、子どもの中に記憶された情報としての「顔」を照合し、それが「自分にとって」どのような意味を持っているのかを判断するのである。これは社会性の萌芽的行動である。このような判断を行うためには、例えば、対象を記憶しておくようなユニットが必要となり、そこに何らかの「自分にとっての意味」を残さなければならぬのである。これによって、初めて外界と自己との関係性が

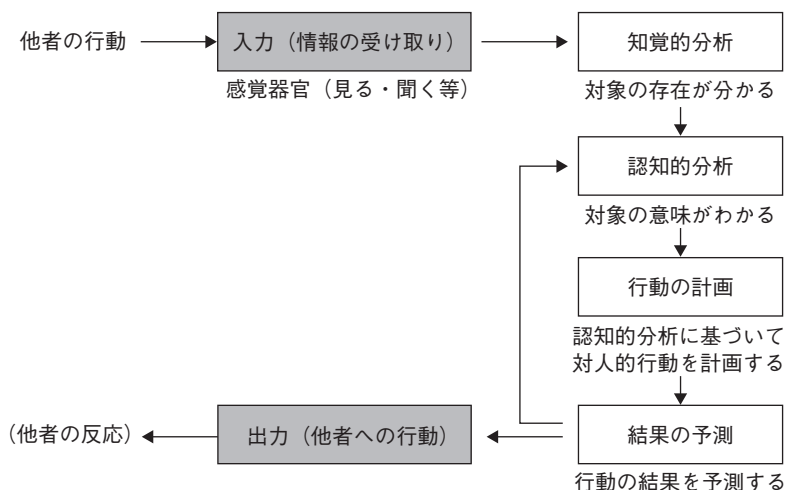


図 認知発達のコア

形成されることになる。このような、環境世界に関する情報を得ることを可能にするプロセスのセットを認知機構とよぶ。子ども達は、このような複雑な過程を、様々な経験によって磨き上げてゆくことになる。

従って、このような機構を構成しているどこかの部分が不調をきたすと、それを要素としているより上位の機能が影響を受けることになる。今回テーマとしている、さまざまな機能の出現時期の確認は、子どもの行動を構成している部品がどの時期にどの順番で準備されてゆくのかを考えるということになる。ある時期に準備されていない要素があるとする、その要素を部品として作られる後の機能にも影響が及ぶということになるのである。この意味で、「developmental hazard (発達の危険要因)」の考え方が重要となる。

将来の発達との関係について、他者との関係性を例にあげてみたい。これは母子関係や仲間関係など、人間として生涯にわたって重要な活動である。このような人と人との円滑なやりとりの能力は、Sociability (社会性能力) と呼ばれるものである。この社会性の欠如は、人と人との関係性が作り出す人間社会における快適さを阻害する要因となり、これがまた、その後の社会適応にもつながることになる。このような Sociability に関わる問題を作り出す要因には、個体が持つ個別要因と、環境要因、そして両者の相互作用要因が考えられる。昨年のテーマであったペアトレは環境要因である母親の行動変容に関したものと見えよう。

これに対して、今年考えてゆこうとする行動の特徴は、個人 (子ども) 側の要因ということが出来る。つまり、個人が何らかの形で有している特徴である。最も分かりやすい例は性別のようなものであるが、個人内の要因は、生物学的な特徴から、疾病に対する身体的脆弱性のような医学的な診断学によって分類されるもの、内向性や外向性のような心理

学的な行動特徴によって分けられるものまで、広範囲に渡っている。

今年度は、これらについて、「at risk」「developmental hazard」の視点から検討してゆく。

iv. 本年度のねらい

上述してきたように、子どもの発達を理解するためには、発達を作り出している生物学的機構や、心理的機構に関する基礎的な事柄を知っておくということが重要である。個々の要素がどのように相互関連しており、それらがどのような後の行動と関係しているのか、それはどうしてなのかという事を知ることは、支援の在り方にもつながる重要な視点であると考えている。

今年度は、「at risk」な事例を上げてゆきながら、その中にある関連要素とそれらの関係性、それが将来のどのような発達と関係するのかについて考えてゆく。

2) 第2回 自閉症スペクトラムの捉え方

(講師：石川道子)

i. 自閉症スペクトラム

a) 呼称について

まず、議論を始める前に発達障害全般の特徴を整理しておきたい。自閉症関連障害は、中核型自閉症、アスペルガー症候群、広汎性発達障害など呼称が色々使われているが、最近では自閉症スペクトラム (ASD: Autism Spectrum Disorders) というように大きなかたまりにして呼ぶようになってきている。

b) ASDの脳の情報特性の理解

次に、ASDの特徴を考えてみる。現在は以下の7つの視点から特徴付けられている。

① 視覚優位傾向

目からの情報が入りやすい。視覚的な支援が有効で、モデルを見せることが重要である。

② パーツ（細部）への注目傾向

視覚情報が入りやすいものの、全体像は見えていないことが多い。例えば、「バイバイ」という手の動作模倣をするときに、対面の相手の方に手の甲側を向けて振ることがある。これは、人全体として情報を処理できておらず、手だけを見ている可能性が高い。このように部分への注目が一つの特徴となっている。

③ 2つのことが同時に処理できない

例えば、話を聞きながら目を見るというようなことを同時に行うのは難しい。

④ パターン化しているようなことが理解しやすい

ボールを落とせば（必ず）チャイムが鳴るといったような、決まったパターンでの玩

具を好む傾向がある。このようなパターン化と細部への注目が一緒になったような、ミニカーのタイヤの回転だけをじっと見て満足するような少し変わった玩具の使い方をすることがある。

⑤ パニックになりやすい

上記③、④の特徴から、自分を取り巻いている情報が多すぎたり、自分が知っているパターンから外れた動きなどがあると、パニックになってしまうことが多い。これは、情報の処理方略やキャパシティとも関係していると考えられる。このことは、パニックの対処方法のヒントともなる。

⑥ 記憶の特異性

ASDは、記憶においても特徴的な特性を持っている。視覚の面では、写真的な記憶、聴覚的にはテープレコーダ的な記憶の様式で、あたかもその場面をそのまま記録しているような特徴を示すことがある。このことはパターン化された動きを好むということとも関係している可能性がある。つまり、同じ物であってもわずかな違いがあるだけで、別のものと認識してしまうということである。このため情報が整理されにくく、過去の情報を適切に参照することが難しくなると思われる。また、初めて見るものは分からないということが起こる。聴覚に関しては、同じ情報でも声が違っていると別ものになってしまうたり、その場面で起きた事柄を、ひとまとまりのものとして、すべて再生しないと必要な情報が引き出せないということがおこる。CMやビデオ映像を受け入れやすいのは、これらの画面や音声パターン化され、同じものの繰り返しであることと無関係ではないと思われる。

⑦ 感覚の過敏性

感覚過敏は、主観的な経験であるため、臨床場面でも本人が語らないために分からないことが多い。本人からの聴き取りなどを進めてゆくと、みんなも自分と同じ感じ方をしていると思ってくることが分かってくる。また、主観的に「イヤ」と思った感覚刺激に意識を焦点化してしまい、耐えられなくなってしまうことがある。過敏さは個人差があり、それぞれの感覚情報（視覚、聴覚、触覚、嗅覚など）について過敏さが表れる。しかし、逆に、その刺激に対して焦点化されていないような場合だと、まったく感じていないように見えることもある。

c) 日常生活で苦手になるもの

ここまで上げたような脳内の働きと関係していると思われる行動特徴が、実際の生活の中でどのように表れてくるのかということが問題となる。例えば、話し言葉の使いこなしについては、スタートが遅れる、やりとりができない、ピンチに陥った時に適切に言葉を使えなくなる、人の話を聞けない（理解言語で言うと、対象児が2語文での表出が可能な段階だとすると、理解は単語1つであるというようなズレが見られたりする）、人から自

分にとって必要な情報を言語的に取得できないといったことが起こってくる。

特に情報を取ることに関しては、b) において述べたような特徴から、初めての場所で、動き回る対象が複数いて、何をするかははっきりしない、というような、複雑な情報を処理しなければならないような場面では、情報の取得が困難になる。これは、子どもが広場で遊んでいるような状況や、はじめて保育園に行くなどしたときの状況であり、日常的に見られる場面である。

ii. 0歳児の気になる行動の特徴

では、ASD の子どもたちはどの年齢段階で把握できるのであろうか。ASD の子どもたちは、乳児期の早い時期から特徴的な発達を示しているのではないかとということが徐々に分かり始めている。その時には、ちょっと変わったことをしているな、ちょっと気になるな、という程度で見過ごされがちで、通常の個人差の範囲として理解されることがある。しかし、これまで述べてきたような内的な特徴が顕現化している可能性もある。実際に気になった子ども達の行動を上げながら、ケースでの検討を進めてゆきたい。

乳児期について、まず講師からいくつか特徴的な例を挙げてみよう。

a) 乳児期において見られた例

例えば、いずれかの感覚器官において過敏性があると、児は、起きているときは常時気分悪い状態が続き「むずがり」が現れたり、泣きっぱなしの状態を示すことになる。あるいは逆に、不快な感覚刺激を遮断しようとする行動が生じ、長い時間寝たままということが起きたりする。前者の場合は、刺激の嵐の中にいるので、自分自身の身体が出しているサインや活動のリズムが分からない状態を作り出すことになる。後者の場合は、養育者からすると、よく寝るおとなしい子という印象を受けることになるが、児を取り巻いている周囲の情報を取り込んでいないため、養育者が送るサインや身体活動によって作られるリズムを感じにくくなる可能性がでてくる。

身体のサインとは、空腹、眠いという欲求と関連した自己受容的な感覚である。また、リズムは、睡眠リズムや食事、排せつなどの生活リズムである。これらが適切に形成されないと、他者との関係だけでなく自己の内的な組織化が進まず、段階の移行が円滑に進まないことになる。外界との適切な相互作用を持つ経験が不足することになるのである。

同様のことは、姿勢などの身体活動においても考えられる。仰臥位や腹臥位のまま姿勢が保持され続けると、姿勢の変換やバランスの立て直しにともなる、感覚運動系の統合や、自己受容感覚の形成経験が遅れ、それらを要素とする移動手段的獲得が遅れることになる可能性が考えられる。

問題は、このように明らかな形で行動の遅れが現れる場合だけではない。行動の出現が遅れているように見えたのであるが、いつのまにか次の段階の行動が出現している場合があることである。例えば、一般的には、寝返りがあり、お座りがあり、ハイハイがあり、